

第1612回（6月14日）

結婚市場と農民

——フランス農村社会学との関連から——

須田 文明

農業後継者の「嫁不足」問題については、様々な媒体により報告されている。いったい職業カテゴリーに応じて結婚機会に格差が生じるのは、なぜなのであろうか。残念ながらこうした問題を学問的に論じた研究はきわめて稀である。本報告は農民の独身問題を早いうちから検討してきたフランスの社会学者、ピエール・ブルデューの所説を手がかりにして、こうした課題に取り組んだものである。

まず最初に、ブルデュー社会学の特徴と、そのフランス農村社会学への浸透について手短かに概観された。続いて、ブルデューの議論が詳細に検討され、農民的世界が開放されるにしたがって、結婚市場が統一されることになった事情が述べられた。こうした事情のもとで、農民は象徴的に富裕なライバルと競合せざるを得ず、その結果、農民の独身問題が生じたというのである。

ところでこのような農民的価値の下落をもたらした過程を、ブルデューは、象徴革命と呼ぶが、その背景には教育システムがあると指摘した。農民はいわば象徴的に支配された集団であり、こうした象徴的支配を覆すためには、価値基準の二重化による農民相互の対立（農民は自分の息子に望むことを娘には望まない、という結婚戦略の二重性にあらわれる）を克服し、農民を集散的に動員することが必要であると説かれた。

こうしたブルデューの議論は、フランスの現実のデータに照らしてどのように評価されるのであろうか。まず農民の未婚率の動向を見ると、75年をピークに未婚率が減少する傾向が見られる。次に農民の様々な属性と未婚率の相関が検討される。地理的にはパリ周辺で未婚率が低く、山間地では高い。また、農

民の独身問題は主として小規模農家の問題であることが確認された。しかし、農業環境との親和性が未婚率を高めているという事情から、ブルデューのいう象徴的支配についても考える必要が認められた。

また、ブルデューは農民が象徴的に被支配的な集団であるがゆえに他の社会カテゴリー間との通婚は稀で、きわめて同類婚的であるとしているが、実際のデータから見る限り、こうした現象は著しく低下している。

また、農民の独身問題の原因を農業婦人の低い地位に求める主張についても検討を加えた。